

## 尾池恭庵・薫陵の事蹟と著述について

— 讃岐に伝承された後藤流古医方 —

長野 仁

北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部

演者は現在、[医書][薬方書][本草書]などの仮題が附された佚名の医書群、先学が取り上げたことのない無名の医書群を、全国各地で調査している。とりわけ、今世紀に公開された内藤記念くすり博物館の大同薬室文庫（浅田宗伯高弟・中野康章旧蔵書）には、こうした医書群が多量に含まれている。昨年8月に閲覧した『恭庵先生口授』（No.35619）には、後藤良山と香川修庵の邂逅に関する新知見が記されていたために瞠目した。そこで、口述者「恭庵」と筆録者「維明」を調査したところ、丸亀藩医・尾池恭庵と高松藩医・宮武維明の師弟であることが判明し、また、恭庵の養嗣・薫陵の著述が少なからず現存することも確認できたので、ここに報告するものである。

白井要の『讃岐医師名鑑』（1938刊）によれば、尾池恭庵（?～1771）は後藤良山の門人で、実子の義永と義漸が共に早世し、寛延元年（1748）に16才で入門してきた谷口正常（1733～1784）が秀抜だったため、やがて娘を配した。この養嗣が尾池薫陵で、字は子習という。現存する父子の著述は全て写本で、前掲書のほか、父の『恭庵先生雑記一方録之部一』（1810写）、子の『試効方』（1753自序）・『経穴摘要』（1756自序）・『素靈八十一難正語』（1763自序）・『医方便蒙』（1810写）・『古方要方』・『脚氣論治』が管見に入る。

浅田宗伯の旧蔵にかかる『恭庵先生口授』は、元は4冊で今は夏・秋の2冊を欠くが、『栗園蔵書目録』（1891成）に「二冊」と著録されていることから、すでに入手段階で欠本していた可能性が高い。とはいえ、「栗園叢書／第一号」の付箋から、宗伯が稀観書の筆頭と位置づけていたことが窺われる。高梁市立中央図書館には、巻頭に『病因考』下」と記された冬冊の別伝本（進国31）が所蔵される。巻末の識語から、恭庵による良山『病因考』の口授を宮武維明（正蔵）が筆記し、それを天明5年（1785）に維明の某友が謄写したものと分かる。維明が受講したのは恭庵が没する3年前の明和5年（1768）で、内藤本と高梁本は大同小異につき、両本ともこの自筆稿が祖本ということになる。したがって、失われた内藤本の秋冊は『病因考』の上巻とみてよい。

特に注目したいのは、恭庵が没する前年の明和7年（1770）に筆録された、遺稿的な春冊である。夏冊の内容を知る手立てはないが、「方録之部」を副題に持つ京大富士川文庫の『恭庵先生雑記』（キ・146）が該当するのでなければ、春冊の続集だったのかも知れない。

さて、春冊の冒頭、良山と修庵先輩の邂逅について、恭庵は次のように懐述している。

元禄6年（1693）、修庵の父・小三郎は京都で良山に拜謁し、11才になる我が子の入門を懇望して確約を得たが、播磨に戻った父は間もなく没した。同11年（1698）まで叔父に養育された修庵は16才となり、入門を果たすべく連れ立って上京したが、良山は修庵の才能を見抜き、「若キ英才ヲ医ニシ、吾門ニ属セシムルモ、亦惜ムヘシ。幸ニ今、伊（藤）仁斎アリ。コノ人ニ託シテ儒トスヘシ。必、仁斎ト比肩モスヘシ」と固辞した。結局は、叔父の執念に押し切られて入門を許すのだが、断った「底意ニハ、彼カ英才ヲ以テ医トナラハ、必一箇ノ医説を發スヘシ。コレヲ主張スレハ、吾発スル医ノ行ルニ妨害セン」との危機感があったのだという。しかし、修庵は「天下ノ医風ヲ古ニ復シ、灼艾ノ一法ヲ遍ク海ノ内外ニ拡ン」という良山の悲願を継承し、師をして「太沖、今ニ至テヨク吾道ヲ信シ、ヨク拡シテ少モ吾志ニ違背ハセサル」と言わしめた、と締めくくられている。

この一例のように、丸亀藩医・尾池家の著述には、後藤流古医方の内情を伝える貴重な言説が温存されているため、包括的な研究が急務と考える次第である。